

第4章 文末の構造体

第4章では、第1章から第3章までで作上げた基盤を基に、本稿の主たる目的である〈話されたことば〉の談話を成す文の存在様式、とりわけ文末の構造体のあり方を具体的に描く作業に入る。

まず、話された文の存在様式をどう見出せるのか、という問いを立てる。それに答えられるものは、音声や意味、機能を含み、形態や統辞的な側面から接近し、その全貌を明らかなものにできる方法でなければならない。

本研究では〈話されたことば〉を分析するにあたって、音声言語を文字言語に転写するという文字化の作業を行った。こうした作業には、いわゆる文法的な観点はもちろん、音論的な観点からの照明が不可欠なものとしてあった。音についての関心は本研究のすべてに渡っているものだといえる。こうした音論の支えを大前提とし、伝統的な言語学でもしばしば採られてきた4つの視座から文末を照射してゆこう。

4.1. 文末の形の文法的同定

談話を成す文の姿、また〈話されたことば〉の文の姿を描き出すために、文の最も核心的な部分となる、文末に注目し、文末の構造体のあり方の究明に力点を置く。変幻自在に動いているように見える、〈話されたことば〉における文の文末は、一体どのような性質の単語で結ばれるものなのかを照らし出す。そのため、文末を形作る単語などの諸要素は文法的にはいかなる性格を持つものなのか、また、文末形式がどのような文法的な形をとっているのか、単語がいかなる品詞により成り立っているのかを探ってゆく。

そのため本研究では、言語を照らす伝統的な4つの視座から〈話されたことば〉の文末を見てゆくことにする。すなわち、〈語彙論〉、〈形態論〉、〈統辞論〉、〈意味・機能論〉からなる視座である。

品詞論を語彙論と統辞論とに跨るものであるとするなら、本研究の以下の展開は各々主として次のような点からの分析、ということになるろう：

- (1) 述語の有無：統辞論から文の構造を照らす
- (2) 品詞の区別：形態論と品詞論から文の機能を照らす

上に上げた項目は、潜在的には〈語彙論〉、〈形態論〉、〈統辞論〉、〈意味・機能論〉に

すべて跨る性格を持っている。

本研究は、80組の談話データのすべての文、すなわち全談話の1文、1文を上記の項目から照らすという緻密な考察を通じて、文末の構造体のあり方に近づいてゆくことを試みるのである。

4.1.1 述語の有無

述語に注目し、その有無を考察することにより、統辞論的視座からの日本語と韓国語の違いを明らかにすることを目的とする。

4.1.1.1 述語の先行研究

「述語」の範疇を確かなものとして固めるため、重要な先行研究から「述語」の概念を確認する。

亀井孝他編(1996)では「述語」について「述語こそは文の核心をなす」とされており、「述語の中心となるものは動詞、または用言である」とされている。国立国語研究所(1978:24)では、「事象を描くのにかなめになることばはいわゆる動詞だけでなく、形容詞などもある」とし、「それらを総称する場合は「述語詞」あるいは単に「述語」ということにする」としている。また、森岡健二(1994:113)では「一語文は、言い切りの語一つからなる文であるが、多くの文は二語以上が連なり、普通は言い切りの語が文末に来て、そこで叙述が完結する。この文末の言い切りの語が「叙述語」である」と述べ、叙述語には動詞、形容詞、名詞などを挙げ、「名詞+です」(1994:388)の形も叙述語として述べている。

一方、韓国語においては최현배(1929:749)は「임자말과 풀이말과는 월의 가장 으뜸되는 조각이니, 아무리 홀진 월이라도, 이 두 가지 조각만은 갖춰야 능히 월이 될 수 있느니라.」(主語と述語は文のもっとも中心になる成分であり、簡単な文においてもこの2つの成分が揃ってこそ文に成りうる:筆者訳)と文における述語の重要性を述べると同時に、「풀이자리에 서는 말은 주장으로 풀이씨(用言)이니: 움직씨, 그림씨, 잡음씨의 세가지가 다 여기에 쓰히느니라. (1929:763)」(述語になるのは動詞、形容詞、指定詞の用言である:引用者訳)と述べている。허웅(1975:42)も「월의 중심이 되는 성분은 풀이말인데, 주로 풀이씨(움직씨, 그림씨 따위)가 풀이말의 노릇을 한다.」(文の中心になる成分は述語であり、主に動詞、形容詞などの用言がその役割を果たす:引用者訳)と主張する。また、남기심(2001:73)も「서술어는 한 문장을 이루기 위하여 가장 핵심이 되는 필수적인 성분」(述語は1つの文を成すためのもっとも核心になる不可欠な成分:引用者訳)と述べてお

り, 노마히테키 [野間] (1996b:137) は “한국어의 문장의 핵(nucleus)은 술어(predicate) 이다.” (韓国語の文の核は述語である: 引用者訳) と述べている。

両言語についてこうした記述からもわかるように, 文の核心を成すのは文末の述語であるという見解は有力なものであると言えよう. それでは文末の述語は日本語や韓国語においてどのような姿で現われているのだろうか. そして談話を成す基本単位である文は, そもそもそうした核心たる述語を常に持っているのだろうか.

4.1.1.2. 述語一用言の特別な形

ここで1つ注意すべきことは, 文末に現れる述語は, 「간다」「行く」, 「먹어요」「食べます」などのように単独の単語に語尾がついた形で独立して現れる場合もあるが, 少なからず, 「가겠지」「行くだろう」, 「먹었는데요」「食べましたけれども」, あるいは「갈 수 있어요」「行くことができます」, 「먹은 것 같아요」「食べたように思います」などのように述語の核となる単語に様々な要素が付随して現れるという点である. 文末の構造体を探るためには, 単一の単語としての述語にのみ注目するのではなく, 述語を含む, 文が終わるまでの末尾全体に注目しなければならない。

述語を含む, 文末の部分を見るのに次のような構造体で考えることができる. 亀井孝他編(1996)で河野六郎が言う「用言複合体」と, 菅野裕臣(1981,1988), 野間秀樹(1996,forthcoming)が言う「用言の総合的な形 synthetic form」, 「用言の分析的な形 analytic form」である。

亀井孝他編(1996)で河野六郎は「用言複合体」について, 次のように述べている:

日本語の動詞は, 単純な形で現れる場合もあるが, 多くの場合, いろいろな接辞(助動詞)や助詞が付いて, それでまとまった具体的な形となる. (中略) その語基にさまざまな接辞や助辞(particle)を付けて, いろいろな具体的な構成体をつくり出すが, この構成体という具体的な単位には, 従来, 特別の名称がなかった. そこで, 仮にこれを動詞複合体(verb complex)とよぶことにしたい. そして, 日本語の複合体は動詞だけでなく形容詞や形容動詞にもみられるので, これを用言複合体と称することにする

例えば, 「書かない」のように, 動詞「書く」の語基「書カ-」に否定の助動詞「ナイ」がついた形や, 「書カ・セ・ラレ・マセ・ン・デシ・タ」のように複数の接辞(助動詞)がついて1つの構成体を成すものが「用言複合体」⁴³である。

一方, 「総合的」, 「分析的」という用語は, サピア(1998:221) とブルームフィールド

⁴³ 風間伸次郎(1992)は文末に現れる定動詞(finite verb)を用いて, 日本語の動詞複合体の諸形式, 相互の承接順序を述べている。

(1965:271)⁴⁴が言語の分類法として、「総合的言語」,「分析的言語」という術語を用いているのにその例を見出せる. また, 寺澤芳雄(2002:30,655)によると,「総合的」,「分析的」という術語は言語の類型の区別のため, Max Müller が初めて言語学に導入したとされている.

「総合的な形」と「分析的な形」という用語は, 韓国語学においては菅野裕臣(1981,1988)が積極的に用いはじめ, 노마히테키[野間](1996b,forthcoming)ではさらに論議が進められている. 「用言の総合的な形」について, 菅野裕臣他(1988)と노마히테키[野間](1996:143, forthcoming)は次のように述べている:

表 25 用言の総合的な形 synthetic form

菅野裕臣他(1988)	1 単語内の色々な文法的な形 (すなわち語幹+接尾辞+語尾)
野間秀樹(1996:143)	한 단어 내부에 각종 접미사, 어미가 결합한 형식 (一単語の内部に種々の接尾辞, 語尾が結合した形:筆者訳)

これらが言う「用言の総合的な形」は, 河野六郎(1996)の言う用言複合体と, 用言の語幹に接辞や助詞(語尾, 助辞)などが結合するという点において, 相通じるものがある.

また, 「用言の分析的な形」については, 菅野裕臣他(1988)と노마히테키[野間](1996b:143, forthcoming)は次のように述べている:

表 26 用言の分析的な形 analytic form

菅野裕臣他(1988)	(後置詞, 不完全名詞, 補助用言) 補助的な単語を含む 2 単語以上からなる文法的な形
野間秀樹(1996:143)	하나로 굳어지면서 용언의 mood, modality 어형으로 성장한 것들이 있다. <할 것이다>, <하는 것이다>, <할 것 같다>, <할 수 있다>, <하고 싶다>, <해도 되다>등 많은 예를 찾을 수 있다. 기실 기능적으로는 구조체 전체가 용언의 paradigm 으로서의 구실을 하는 <분석적인 형식>이며, 문장구조를 생각할 때, 그 구조체 전체를 문법화(grammaticalization)된 용언의 어형의 일종으로 간주하는 것이 바람직하다. (1 つにまとめ, 用言の mood, modality の語形に成長したものがある. <hal kesita>(するのだ), <hanun kesita>(するものだ), <hal ke kkatta>(しそうだ), <halsuissta>(できる), <hako siphuta>(したい), <haydo toyta>(してもよい)などの多くの例がある. 事実上機能的には構造体全体が用言の paradigm としての役割をする「分析的形式」であり, 文の構造を考えると, その構造体全体を文法化された用言の語形の一種で捉えるのが望ましい:筆者訳)

⁴⁴ ブルームフィールド(1965:271)は「付属形式をわずかしか用いない分析的(analytic)言語」と「それ(付属形式)を多く用いる総合的(synthetic)言語」と説明している.

以上の記述を参考に、本稿では用言複合体、用言の総合的形、用言の分析的形と呼ばれる構造体は、「述語」という範疇でまとめて取り上げることとする：

述語：用言を含む、用言複合体ないしは総合的な形、分析的な形からなる文を統合する文の成分

4.1.1.3. 述語の2つの形: 用言の総合的な形 synthetic form と用言の分析的な形 analytic form

菅野裕臣他(1988)と노마히데키[野間](1996b:143, forthcoming)に倣って、本稿においては日本語も含めて、述語を用言の総合的な形、分析的な形という視点で見ることとする：

表 27 本稿における日本語と韓国語の用言の総合的な形

	日本語	韓国語
定義	一単語に種々の助詞や助動詞などの付属形式が結合し、一単語を形成する総合的な形	一単語に種々の接尾辞や語尾などが結合し、一単語を形成する総合的な形
形	1 単語, 1 単語+助詞・助動詞などの付属形式	1 単語, 1 単語+接尾辞, 語尾(助詞)
例	私ですよ：名詞+指定詞+終助詞 読みましたよ：動詞+終助詞 忙しくない：形容詞	저예요 (私です)：名詞+指定詞 읽었어요 (読みました)：動詞 예뻐거든요 (きれいでしたから)：形容詞

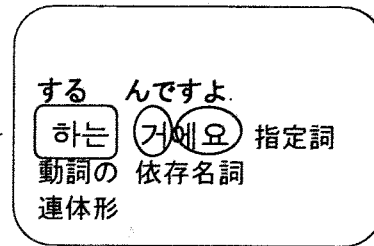
なお、日本語の学校文法でいう「助動詞」の主なものは、ここでいう韓国語の「接尾辞」に相当するといってもいいだろう。

表 28 本稿における日本語と韓国語の用言の分析的な形

	日本語	韓国語
定義	1つの自立用言に補助的な単語を含む2単語以上が結合し、1つの用言の語形の一つのごとく文法化されたもの	
形	2単語以上	2単語以上
例	するかもしれない したりもする, したことがある するのだ, するんだ, なのだ, なのです. しないといけない したじゃないですか, 気がする するみたいだ, することにする するわけではない, やっておく, やってみる, やっている, できている, やってしまう	해 가지고, 해 주다, 해 두다, 해 보이다, 해 보다, 해 놓다, 해 있다, 하고 있다, 하고 그러다, 한 것 같다, 할 것 같다 하는가 보다, 할 줄 알다, 할 줄 모르다 하기는 하다, 하기도 하다, 하기로 하다 하게 되다, 하게 하다, 한 적(이) 있다 하는 것이다, 한 것이다, 할 것이다, 한 거야, 하는 거야, 할 수 있다, 하지 그래 하지를 못하다, 하지 않다, 하지 말다, 안 하다

	하는 거 있지, 하는 거 아니에요?, ...할 일 있냐, 하는 법이다 : 特別な分析的な形 ⁴⁵
--	---

例 : イタリアに 行って英語の勉強を
20代女性 : 이탈리아에 가서 영어 공부를



述語 : 分析的な形

4.1.1.4. 述語の有無の分類

さて、実際の談話では、これまで述べたような述語がすべての文に常に現れるのだろうか。本稿では文末の構造体を、さらに次の2つの軸から浮き彫りにする：

1. 文末に述語がある場合 - 文が述語で終わっている場合は、述語そのもののみならず、述語を含む文末の部分が、どのような形で言い終わっているのか。
2. 文末に述語がない場合 - 文が述語で終わっていない場合は、どのような形で言い終わっているのか。

文末が述語で統合されている文を〈述語文〉、文末が述語で統合されていない文を〈非述語文⁴⁶〉とし、日本語と韓国語の談話を構成するすべての文を述語文と非述語文に分類する。また、別項で述べる品詞分類と形態分類なども、述語文と非述語文の軸を中心に、分析していく。文字化においては次のように判定を行う：

述語文(predicate sentence) = 文末が述語で統合されている文

例：

韓国語 : 어학연수는 기본이 돼 버려 가지구.

이탈리아어 막 까먹지 않아요?

日本語 : 何を踊ってたんですか.

最近ちょっとお休みしちゃってるみたいですけど.

⁴⁵ 菅野裕臣(1981,1988), 노마히데키[野間](1996b,forthcoming)では示されていないが、本研究のデータに現れ、改めて分析的な形として扱うものである。

⁴⁶ 노마히데키[野間秀樹](2002:23)의 술어문(述語文)(predicate sentence)과 비술어문(非述語文)(non-predicate sentence)의 분류参照.

非述語文(non-predicate sentence) = 文末が述語で統合されていない文

例：

韓国語： 지금 막 막 패닉상태.

이름 읽는 거.

日本語： 去年?—今年.

今は別に. — 専門知識とか. — ね.

なお、「みたいだ」「ようだ」のような助動詞の連体形「みたいな」、「ようだ」や引用動詞の「ていう(という)」など、いくつかの単語においては、その単語は〈述語〉であっても文の中での〈統合〉する機能によって述語としては見なさない場合もある。また、「学校とか」「温泉って」のような助詞「とか」「て」などにおいても、助詞の前部に述語が現れていても、文の最後に現れている、助詞「とか」「て」の機能により、述語のない文として判定することもある。詳細は第5章で論じる。

4.1.2. 品詞

文の文末の構造体を品詞別に分析することで、語彙論、形態論の視座から、談話を成す文のあり方を照らす。

橋本進吉(1959;60)は「品詞とは単語を文法上の性質によって分類したもの」と述べている。しかし、今まで論じられていた文法での品詞や品詞分類の基準などが、研究者によってさまざまである点、主に書かれたことばを中心に論じられている点などから、話されたことばをある一定の品詞分類の枠に当てはめて分類する作業は、非常に多くの問題を抱えている。

本稿では、まず、日本語と韓国語の学校文法の品詞分類に大まかな基準を置く。しかし、学校文法において欠如している部分や問題を抱えている部分などは、各言語の諸研究の議論を取り入れながら補うことにする。また、学校文法や諸研究の品詞分類で言及されていない、〈話されたことば〉の独特な表現においては、ありのままの〈話されたことば〉の特性を描き出すために、本稿の独自の品詞の扱いをすることも試みる。

本稿における両言語の品詞分類の前提は次の通りである：

1. 日本語と韓国語は統辞論的な類似にもかかわらず、互いに異なった言語であるゆえに、品詞分類や項目の異なる部分がある。本稿ではそれぞれの言語の独自の品詞分類に従う。

2. 日本語は日本の学校文法の品詞分類に従う。(中光雄編(2001))
3. 韓国語は韓国の学校文法の品詞分類に従う。(남기심·고영근(1985))
4. 学校文法の品詞分類を基準にするが、〈話されたことば〉をよりリアルに把握するため諸研究の議論を踏まえ、本稿の独自の品詞認定も行うことがある。
5. 個々の単語における品詞は、日本語は『小学館 日本語新辞典』(2005), 『新明解 国語辞典 第五版』(2001)などの辞書を参考にし、韓国語は“연세 한국어 사전(1998)” “국립국어연구원(1999)”の辞書を参考にする。
6. 日本語と韓国語を対照しやすくするために、術語を便宜的に用いることもある。日本語の助動詞のうち、「だ」、「である」、「です」を「指定詞」として扱うなどがこれである。記号化には Copula を用いる。また、日本語の学校文法の「感動詞」を「間投詞」とする。
7. 「笑い」は「あ」、「えー」などの間投詞との区別を図るため、「Laugh」として分類し、間投詞の下位分類に位置づける。
8. うなづきなどの非言語行動によるあいづち表現は考察の対象に含めない。
9. 息を吸ったり、舌を打つなどの行為は、感情表現の「準言語表現」として考えられるが、いわば言語音そのものとはみなさず、「言語行為」としては扱わない。
10. 言語行動によるあいづち発話を考察の対象とする。笑いもこれに準ずる扱いをする。
11. 最後まで言い終わらず、いわゆる単語の途中で発話が終わっているような場合にも品詞判断が可能なものは品詞分類を行う。
例) 私もそこ行き。(ました)
12. 「こ。こ」のように話しかけて途中で終わり、いかなる単語かが推測不可能な発話は品詞の判定は「不明」とする。

4.1.2.1. 日本語における品詞分類

以下は、日本語の学校文法(中光雄編(2001))における品詞分類である。記号化のための英語の術語は本稿で付したものである。「感嘆詞」の名称は「間投詞」と変更した。

自立語

動詞 **Verb** : 自立語で、活用があり、単独で述語になる。事物の動作・作用・存在を表す。言い切りの形(終止形)が五十音図のウ段音になる。

形容詞 **Adjective** : 自立語で、活用があり、単独で述語になる。事物の性質や状態を表す。命令形はない。言い切りの形(終止形)の最後が「い」にな

る。

形容動詞 adjEctive verb : 自立語で活用があり, 単独で述語になる。事物の性質や状態を表す。命令形はない。言い切りの形(終止形)の最後が「だ」になる。

名詞, 代名詞 Noun : 自立語で活用がない。助詞「が」をともなって主語になる。また, 単独で主語になることもできる。助動詞「だ」「です」などをともなって, 述語になる。事物の名称を表す。体言ともいう。

連体詞 adnoMinal : 自立語で, 活用がなく, 主として連体修飾語になる。つねに, 体言を修飾する連体修飾語にのみ用いられ, 主語にも述語にもならない。この, その, あの, わが, 大きな, 小さな, おかしな, いろんな, たいした, とんだ, ある, あらゆる, いわゆる

副詞 aDverb : 自立語で, 活用がなく, 主として連用修飾語になる。修飾語にのみ用いられ, 基本的には主語にも述語にもならない。

接続詞 conJunction : 自立語で, 活用がなく, 単独で接続語になる。前後の段落と段落, 文と文, 文節と文節, 単語と単語を結びつける。だから, でも, ただし, それとも, ところで

間投詞(=感動詞)Interjection : 自立語で, 活用がなく, 単独で独立語になる。感動(ああ, うん, あー, え)・呼びかけ(おい, もしもし, さあ)・応答(はい, いいえ, うん)などを表す。

付属語

auXiliary verb 助動詞 : 付属語で, 活用がある。用言や体言に付いて, いろいろな意味を添える。用言や体言に付いて, 述語の文節をつくる。

Particle 助詞 : 自立語で, 活用がない。語と語の関係を示したり, 細かい意味を添えたりする。

本稿ではこうした学校文法に基本的に基礎を置く。

以下, 各品詞別に, 学校文法とは異なる点, あるいは学校文法で明示されていない点のみ, 諸研究の議論と共に取り上げ, 本稿の品詞分類の方向を提示する。

4.1.2.1.1. 指定詞

助動詞の中で, 山田孝雄 (1921:119) は「口語において説明存在詞と称すべきものは「である」「だ」「です」三語あり」と述べ, 「である」「だ」「です」を助動詞の中から区別し,

「存在詞」という名前で扱っている。これに対し、橋本進吉(1959:86)の「山田氏の存在詞は、すべて動詞に一致する。(但シ打消ノ助動詞ノミニハツカズ)それ故、別ニタテル必要ナシ」という反論もある一方、森岡健二(1994:229)には「[-だ] [-です] [-らしい]は、普通、助動詞に分類されるが、動詞だけにつくいわゆる複語尾とは性質が異なる。山田博士の存在詞には動詞「あり」や形容詞の「かり活用」などが含まれて範囲が広がるので、本書は、助動詞と呼ばれるもののうち「だ」「です」「らしい」を複語尾から区別して「判断辞」と呼ぶ」という記述が見られる。

「だ」「です」「らしい」は、活用はするものの、付属語で、用言につくという点から動詞とは区別されるべきであり、また他の複語尾とは異なる性質を持つという森岡健二のこうした見解も妥当性がある。

本稿では、学校文法で提示されている助動詞類から「である」「だ」「です」を区別する。そして存在詞ではなく、指定詞という品詞に分類する。前述のごとく、記号は Copula を借り C とする。山田孝雄や森岡健二がいう「である」「だ」「です」は、韓国語では指定詞という品詞に入るのである。このように両言語において同様の働きをするものは同様の品詞に入れ、品詞の名称による混乱を避け、統一性を図る。なお、山田孝雄が言う「存在詞」とは異なる用言の品詞名として韓国語では *issta*(ある.いる), *epsta*(ない.いない) とそれらの活用形を存在詞と呼んでいる。「らしい」については「助動詞」の項で述べる。

4.1.2.1.2 形容詞

打消の「ない」、希望の「たい」は学校文法では助動詞に分類されているものである。橋本進吉(1959:49)は口語の助動詞について「打消の「ない」希望の「たい」推量の「らしい」は形容詞と同じであるが、「らしい」には「らしけれ」の仮定形を用いない」と述べている。本稿では打消の「ない」が自立語として単独で用いられる場合は形容詞と分類し、「しない」などのように用言につく場合は、助動詞として扱う。また、「したい」など、用言につく希望の「たい」は「したい」全体を形容詞の枠に入れ、「たがる」は動詞と結合した「したがる」全体で動詞に分類する。

また、「美しく」のようなものを形容詞として扱うのか、副詞として扱うのかという問題もある。山田孝雄(1921:84)は「多く」「多き」「おおけれ」は形容詞の活用として捉えている。時枝誠記(1950:140)は「「美しく」だけに即して云ふならば、美しく、赤い花とも云はれるやうに、連体修飾語にも立ち得る語であり、更に他の活用形を考へに入れるならば、一義的に副詞とは云へないことは明らかである」と言い、「国語の用言の活用形は、決して格を表示するものではないのであるから、一語に即して言ふならば、右のやうな形容詞の連用形を副詞ということはできないのである」と述べている。

本稿では、時枝誠記のこの考え方に従い、「美しく」のような形容詞のいわゆる「く形」は形容詞の連用形として見て、形容詞の品詞に入れておく。

4.1.2.1.3 名詞

橋本進吉(1959:74)は体言の種類を「名詞－代名詞－数詞」と「名詞－代名詞」と表しながらも、「名詞を類別するのにいかなる根拠があるであろうか」という疑問と共に、これらを「名詞」で括っている。本稿では、名詞、代名詞(指示代名詞、人称代名詞)、数詞、といったいわゆる体言は名詞として扱う。また、「もの」「こと」「たび」「ため」「まま」「はず」「わけ」などの形式名詞、「見物」「出航」などの漢語の語幹⁴⁷なども名詞として扱う。時枝誠記(1950:157)が提示した「体言的接尾語」類がついたもの、例えば「寂しげ」の「げ」、「読みかた」の「かた」、「寒さ」の「さ」、「赤み」の「み」などがついたものも名詞として扱う。なお、時枝誠記の「体言的接尾語」類の中で、「ながら」は接続助詞、「そう」は副詞とし、ここでは名詞としない。

名詞の品詞でもっとも大きな問題は、いわゆる形容動詞の語幹を形容動詞で扱うのか、名詞で扱うのかという問題である。この点については諸研究においても様々な見解が多岐に渡って繰り広げられている。まず、学校文法の基本をなす、橋本進吉(1958:117)は、「静か」「丈夫」などは、現代口語においては、単独には用いないのが普通である」という見解と共に、「静か」という形容動詞の語幹に「な」「に」「で」などの語尾がついているものとして考え、形容動詞の活用として捉えている。これとは異なって、山田孝雄(1921:17)は、用言に動詞と形容詞、助動詞を入れ、形容動詞は品詞として立てていない。山田孝雄(1921:212)では「明らかに」「親切に」などを体言に「に」がついた副詞として捉えている。また、時枝誠記(1950:70,71)は、「形容動詞の語幹、形容詞の語幹、形式名詞、接尾語の中、語の構成に用いられるもの、接頭語などのものを名詞にはふさわしくないが、体言」として扱っている。すなわち、時枝誠記(1950:133,134)「確かで」「立派で」を形容動詞の連用形ではなく、「確か」という体言に、指定の助動詞「だ」「で」「に」「である」「です」などがついたものとして捉えているのである。少なくともこの点においては、山田孝雄と同様の見解を論じているものと考えられる。

寺村秀夫(1982:69)は、いわゆる形容動詞「元気」、「便利」、「親切」などのグループを語を「シンタクティックにも意味的にも、ちょうど名詞や形容詞の間にあるものと考えて「名詞的形容詞」という一つの品詞を立てることにする」と述べている。

⁴⁷ 無活用動詞、零語尾の動詞とも言われる。橋本進吉(1959:92)は「動詞としての働きは極めて漠然としたものである」と述べ、「準体法」と見ることを提案している。また、金恩愛(2003:7)では「動詞的な名詞」と呼んでいる。

また森岡健二(1994:176)は、形容動詞の語幹といわれるものを「情態言」と呼び、これは「自立する可能性があり、活用語尾なしで終助辞・間投助辞を直接受ける点、自立形式と認めざるを得ない」と述べている。

以上を勘案した上、本稿では「すてき」「元気」「同じ」など独立して用いられる「形容動詞の語幹」を名詞⁴⁸として扱う。形容動詞の語幹に「に」がつくものは「副詞」の項で、「な」がつくものは「形容動詞」の項で後述する。

4.1.2.1.4. 副詞

形容動詞の語幹に「に」がついたものを副詞として扱うのか、「体言」+「に」として捉えるのかも大きな問題の1つである。時枝誠記(1950:133-134)では「確かに」を「確か」という体言に「に」がついた連用修飾語として述べており、一方、山田孝雄(1921:210)は、「に」の働きとして次のように述べている：

「に」は體言に附属してそが静的目標たることを示し、又副詞若くは之に準ずべきものに附属して用言の修飾格に立つことを明にするものなり。

即ち、体言以外に「に」がつくものを副詞に捉えるということである。本稿では、「学校に」「私に」などの「名詞+に」以外の、辞書に「副詞」に分類されていない、「確かに」「静かに」などの形容動詞の語幹に「に」がついた形を、副詞として扱う。一方、形容動詞の語幹に転成を表す「になる」「にする」につくもの、例えば「だめになる」「平和にする」などにおける「だめ」「平和」は名詞とする。また「平和に寄与する」「平和に貢献する」の「平和」も同様に名詞とする。

また、「そんなに」「こんなに」「あんなに」「どんなに」を橋本進吉(1959:107)は副詞として捉えているが、時枝誠記(1950:79)は「副詞的代名詞」と称している。本稿ではこれらも副詞として扱う。

4.1.2.1.5. 形容動詞

吉沢義則などがはじめて形容動詞の術語を用いはじめたとされる。本稿では上で言及したように、「形容動詞の語幹」は名詞に分類し、「形容動詞の語幹+に」は基本的に副詞、上記の「平和にする」などのような一部を名詞として分類する。それ以外の形容動詞の基本形である「だ」や、「静かな」「静かで」「すてきな」「すてきで」のように形容動詞の語

⁴⁸ 金恩愛(2003)でも形容動詞の語幹を「形容詞的な名詞」と名づけ、名詞として扱っている。

幹に「な」「で」がついたものは、形容動詞の活用として捉える。

4.1.2.1.6. 助動詞

助動詞について山田孝雄(1921:296)は次のように述べている：

複語尾は用言の語尾の複雑に発達せるものにして、形態上用言の一部と見るべきものにして、いつも用言の或る活用形に密着して離れず、仲間に他の語を溶るゝことを許さず常に連続せる一体をなすものあり。

山田孝雄(1921:296)は、現在、助動詞と呼ばれるものを、用言(動詞)だけにつく助動詞と種々の語基に附く助動詞の2種に分類している。用言だけにつき、実質的に接辞的性格をもつ助動詞を複語尾と呼んでいる。また種々の語につく助動詞「だ」「です」は存在詞としている。「ようだ」「そうだ」(伝聞)、「そうだ」(様態)は同書には見当たらないが、森岡健二(1994:254)では、山田孝雄の言う、複語尾を認めた上で、「「ようだ」「そうだ」の「よう(様)」「そう(相)」を形式語とし、これに判断辞「だ」の附いた形態」として捉えている。また、山田孝雄(1921:138,139)は「らしい」「ない」は「複語尾」即ち、助動詞として捉えている。本稿では、山田孝雄(1921)の議論を基に、用言の連用形につく助動詞は、形態上、用言の一部と見なして、本体となる用言の品詞で、品詞分類を行う。すなわち、「せる、させる」、「れる、られる」、「しない」の「ない」、「しましょう」の「ましよう」、「いこう」の「う」などの「用言の連用形、未然形+助動詞」は「用言」の品詞で決定する。例えば、「行かれる」、「行かない」、「行きましよう」などはそれ全体を動詞として扱う。

一方、用言の連用形以外、すなわち用言の連体形や終止形、名詞、副詞などにつく、「らしい」「そうだ」「ようだ」「みたいだ」のような助動詞の場合は、「本体の品詞+助動詞」のように助動詞を記す。また、助動詞が単独で現れている場合も助動詞の品詞を記す。ただし、「ない」は形容詞、「である」「だ」「です」は指定詞 Copula として扱う。

- 例)
- ・用言の連用形+助動詞=本体の用言の品詞
たべない：動詞 V いない：動詞 V
 - ・単独に現れた助動詞
らしい：助動詞 X
 - ・名詞+です
学生です：名詞+指定詞 NC

- ・体言+助動詞

金曜日みたいで：名詞+助動詞 **NX**

- ・用言の終止形+助動詞

家出するみたいな：動詞+助動詞 **VX**

また、上の 1.3.1.2 でも述べたが、例外的に「たい」、「たがる」は用言の連用形についていても、形容詞または動詞として扱う。「食べたい」は形容詞で、「食べたがる」は動詞となる。

4.1.2.1.7. 助詞

時枝誠記(1950:162)は「辞」の一般的な性質について次のように述べている：

概念過程を経ないところの表現で、(一)表現されることがらに對する話し手の立場の表現である。(二)話し手の立場の直接的表現であるから、つねに話し手に關することしか表現出來ない。(三)辞の表現には、必ず前の表現が豫想され、詞と辭の結合によって、始めて具體的な思想の表現となる。(四)辞は格を際召すことはあつても、それ自身格を構成し、文の成分となることはない。

そして、「話し手」の立場を理解するために、「意味」を助詞の分類の基準として、「格を表はす助詞、限定を表はす助詞、接続を表はす助詞、感動を表はす助詞」(時枝誠記 1950:216)とに分類している。

一方、橋本進吉(1958:127)は「辭は、文節の切れ續きに關係するものであるから、辭が文節の切れ續きにどんな働きをなすかによつて分類する」ことも必要であると述べ、助詞をどのような品詞につくのかによつて次のように分類している：

体言につく—格助詞(が、を、に、と、から…)

用言につく—接続助詞(ば、けれども、のに、から、ので)、準體助詞(の)、終助詞(な、ぜ、ぞ、て、わ)

種々の語につく—係助詞(も、こそ、さへ、でも、しか)、副助詞(だけ、まで、ばかり、など)、間

投助詞(ね、な、さ)、並立助詞(と、や、に、だの)、準副助詞(ながら、きり、まま)

このように、助詞の分類は研究者によって、異なる分類が行われているなど、一括して助詞の分類を定めるのは困難である。本稿ではほとんどの助詞類は一括して「助詞」の中で扱うが、とりわけ接続助詞と終助詞は区別して表記する。接続助詞と終助詞は、

韓国語の語尾に当たる働きもしており、その区別により、後述の文末の構造体をみる「4. 用言の形態」が考察できるからである。なお、橋本進吉(1958:127)の分類の中で、間投助詞は本稿では終助詞の枠の中で扱うことにする：

・格助詞，副助詞などは助詞 P で表す。

例：ご飯は?：名詞+助詞(NP)，

するとか：動詞+助詞(VP)

・終助詞(ね，か，な，よ，ぞ，ぜ)は Final partical の「F」で表す。

例：昨日ね：名詞+終助詞(NF)

・接続助詞は cOnjunction partical の「O」で表す。

例：明日，電話しますから：動詞+接続助詞(VO)

辞書によると、接続助詞では「…たならば」、終助詞では「早くしろったら。」の「たら」のように接続助詞と終助詞とその意味や用法が異なるものがある。しかし、「けど」、「けれども」は、文末に用いられたものは、終助詞として扱い、また、「から」、「ので」は金田一京助他(2001)では文末に用いられていると、「終助詞的」とされている。

しかし、本稿では既存の終助詞との区別を行うため、こうした接続助詞が文末に用いられていても、「接続助詞」として分類する。

4.1.2.1.8. 間投詞

上述のように、学校文法で感動詞と呼ばれるものを、本稿では間投詞と呼ぶことにする。感動、呼びかけ、応答などを表すもの以外に、あいづち発話として用いられている、「そう」、「なるほど」などのあいづち詞も間投詞として扱う。また、あいさつことばの「おはよう」、「こんにちは」なども間投詞として扱う。

あいづち詞の「そう」の類は次のように分類する。

「そう言った」、「そうする」などの「そう」は副詞とし、「副詞+動詞」(DV)で記す。

また、「そうです」、「そうか」の場合の「そう」も副詞であるが、間投詞的⁴⁹に用いられているため、本稿では間投詞として扱い、「間投詞+指定詞」(IC)、「間投詞+終助詞」(IF)と記す。

「そう」があいづち詞として単独で現れている場合は間投詞として記す。

また、「笑い」は「あ」、「えー」などの間投詞との区別を図るため、「Laugh」として

⁴⁹ 金田一京助他(2001)『新明解国語辞典 第5版』などの辞書にも「間投詞的に」とされている。

分類し、間投詞の下位分類に位置づける。

4.1.2.1.9. 1 単語ごとに特記すべきもの

基本的に松井栄一編（2005）『小学館日本語新辞典』、金田一京助他（2001）『新明解国語辞典 第5版』などの辞書を参考に品詞を決定する：

1. 「じゃん」:

「じゃない」は「助動詞」として扱うが、文末につく「じゃん」は「終助詞」として扱う。「じゃん」は「じゃない」の短縮形の話しことばとして考えられているが、「じゃん」が1つの形として化石化され、多く用いられていることから、本稿では「終助詞」として判定する

例： A：私、2月に3日に行ったんです。
B：あ、1週間違いじゃん。

2. 「じゃ」:

辞書には「接続詞」のみ記されている。単独で現れ、文脈をつなぐ「じゃ」は「接続詞」として扱う。

例： A：何って呼べばいいですか。
B：じゃあ。
A：木村さんで、じゃあ。
B：じゃ、木村さんで。

一方、体言について、助詞「は」の意味で用いられる「じゃ」は本研究では「助詞」として扱う。

A：高校受験、無理。
B：無理か、あそこじゃ。

3. 「だって」:

辞書には「副助詞」、「接続詞」とされている。本研究では、文の最初に現れ、文をつなぐ「だって」は「接続詞」で扱う。文の最後に現れ、文を終わらせる「だって」は、「助詞」として扱う：

例： 一人で行くのはいやだよ、だって。

4. 「なんか」:

文の最後に現れ、文を閉める「なんか」は「副助詞」として判断し、「助詞」の項で扱う:

例: なに、代ゼミ多くなーい、なんかー。

5. 「なんて」:

文の最後に現れ、文を閉める「なんて」は「副助詞」として判断し、「助詞」の項で扱う:

例: どなたと私はお話する のかなー、なんて。

6. 「もう」:

辞書には「副詞」と「間投詞」とされている。文脈によって「副詞」として扱うが、文の最後に現れ、文を閉める次の例のような「もう」は「間投詞」として扱う:

例: それは本当にやめようよ、もう。

7. 「だったら」「けど」:

辞書には「だから」は「接続詞」として提示されているが、「だったら」「けど」は提示されていない。指定詞の「だ」に接続助詞「たら」「けど」がついている形として分析することも可能である。しかし、本稿では、単独で現れる場合は独立した「接続詞」として判定する。

8. 「どういった」:

辞書には提示されていない。「どういう」の活用形ではなく、「どういった」で化石化された単語として捉え、本稿では「連体詞」として判定する:

例: お仕事はどういった。

9. 「みたいだ」:

その活用形によって最も「述語の有無」と「品詞」の判定が困難な単語である。前述した品詞分類の議論を基に本稿では次のように品詞を判定する:

「用言」もしくは「体言」+「みたいだ」, 「みたい」, 「みたいで」: 助動詞

「用言」もしくは「体言」+「みたいに」: 副詞

「用言」もしくは「体言」+「みたいな」: 品詞は助動詞として扱うが, 「文の統合性」の性格が弱いため, 述語としては認められない. すなわち「非述語文」として扱う. 「みたいな」に関しては第5章で後述する.

4.1.2.2. 韓国語における品詞

以下は, 남기심·고영근 (1985) に見える, 学校文法による韓国語の品詞分類である:

体言: 主に文の主体になる

・Noun 名詞(代名詞 Pronoun, 数詞 numeral): 対象を表す単語.

関係語: ・Particle 助詞: 自立性のある単語に付き, その単語と他の単語との関係を表す.

・(叙述格助詞): 用言の性格を持っている ‘-이다’

用言: 主体を叙述する. 活用する.

・Verb 動詞: 動作, 作用を表す.

・Adjective 形容詞: 性質, 状態を表す.

修飾言: 他の単語を修飾する. 活用しない.

・adnoMinal 冠形詞: 名詞の前で, その意味を修飾する.

・aDverb 副詞: 動詞と形容詞の前で, その意味を修飾するものがある.

独立言: 後続する文と関係を持たず, 独立して用いられる

・Interjection 間投詞(感嘆詞): 話者の感情と応答を表す.

4.1.2.2.1 用言の分類

用言の分類における議論はさまざまである. 韓国の学校文法では動詞と形容詞のみを認めている. しかし, 최현배(1929:187)は「우리는 풀이씨(用言)를 갈라서, 위에 말한 바와 같이, 움직씨(動詞)와 그림씨(形用詞)와 잡음씨(指定詞)의 세가지로 가르느니라」(我々は用言を動詞と形容詞, 指定詞の3つに分ける:筆者訳)といい, 用言を動詞, 形容詞, 指定詞に分けている. また, 이희승(1968)は用言の中に「動詞, 形容詞, 存在詞」を認めている.

一方,菅野裕臣(1985: 63-65), 野間秀樹(1998)は, 存在詞は形態的に, ある場合は動詞と同じく, ある場合は形容詞と同じく変化することをもって, 動詞や形容詞とは別に扱っている. 指定詞も形態的に形容詞と似ているが, 一部異なって現れるので独立して

扱っている。すなわち、用言を「動詞、形容詞、存在詞、指定詞」の4つに分類しているのである。なお、서정수(1996:590)、油谷幸利(2005)なども「動詞、形容詞、存在詞、指定詞」の4つの分類を行っている。

用言の4つの分類は活用の形が異なって現れることを基準にしたものである。本稿でも用言を動詞、形容詞、存在詞、指定詞の4つの分類に従うことにする。

4.1.2.2.2. 名詞

「압도」(圧倒)、「정리」(整理)など、漢字語の語幹からなるものも名詞⁵⁰として扱う。活用できない名詞の形をとりながらも、格支配を見せるなど、用言の性格を見せる単語である。

4.1.2.2.3. 接続詞

学校文法では接続詞を副詞として扱っている。それは최현배(1929,1994:602)の以下のような記述にも影響されているものと思われる：

「...우리말로써 이음씨 혹은 접속사(接続詞)라 하면, 생각씨(觀念詞)로 보기보다, 차라리 한 가지의 토(助詞)로 보는 것이 일반의 어감이다. 그런데 우리말의 토는 원시(元是)생각씨가 아닌즉, 서양이나 일본의 접속사라는 것 하고는 단판으로 다르다. 그리하여, 나는 여기에서 그 접속하는 어찌씨스런 생각씨(副詞性觀念詞)를 이음씨라 하지 아니하고, 다만 어찌씨의 한 갈래로 잡았노라.

また、菅野裕臣(1986:63-65)は、接続詞を「文と文、単語と単語を結ぶ」働きをし、語尾を持たない品詞として立てている。文と文をつなぐ働きをする点から本稿では接続詞としてその品詞を認めることにする。日本語との品詞分類の統一性を図るためでもある。

4.1.2.2.4 連体詞

韓国の学校文法の冠形詞を、本稿では連体詞と呼ぶ。

4.1.2.2.5. 後置詞

서정수(1996:770,778)では「-에」「-에서」「-로」など、副詞格助詞を後置詞と呼んでいる。一方、菅野裕臣(1986:60)では「体言や用言の直後につく付屬的な単語を後置詞」と

⁵⁰野間秀樹(1990:36)では「用言的名詞群」と呼んでいる。

言い、「関係を示す」働きをするので、1つの品詞として立てている。例えば「-에 대해서, -에 관해서, -에 비해서, -를 향해서, -를 막론하고, -와 함께, -와 동시에」のようなものである。

「-에」「-에서」「-로」など、서정수(1996)が言う「後置詞」は本稿では「助詞」として扱う。また、菅野裕臣(1986)の後置詞に上げられている単語は韓国の学校文法に従って、それぞれの品詞に帰属させる。例えば「대해서」や「관해서」は動詞といった具合である。もちろんこれらはいわば、一部の活用形しか持たない不完全動詞、あるいは欠如動詞ということになる。これもまたできるだけ日本語と韓国語を対照しやすくするためでもある。

4.1.2.2.6. 1 単語ごとに特記すべきもの

1. 用言+더라고요(…したんですよ):

辞書には、「더라고」、「더라고요」は間接話法や直接話法の引用形の語尾とされてきた。しかし、実際の会話では引用のときよりも話者の体験や回想を述べる時多く用いられている。また、노마히데키[野間] (1996a)は「体験法」として記述され、이희자, 이종희(1999:170)では「過去経験した事実を聞き手に知らせる意味を表す:引用者訳」と述べている。

本稿ではこうした用法の「더라고」、「더라고요」は「引用形」とせず、「体験法」の「終止形」として扱う。

2. 「그러니까」(だから), 「그러다가」(そうしていたら), 「그러면」(それなら), 「그래두」(それでも), 「아니면」(そうでなければ):

上記の単語が前の用言を指す場合は「動詞」に「語尾」がついたものとして判断する。しかし、文脈によって前のことがらをつなげる機能を表わしている場合は、本稿では「接続詞」として判定する。이러니까(こうするから), 이러다가(こうしてると)は動詞の活用形として扱う。

なお、本稿の談話データにおいての上記の〈接続詞〉は、助詞「는, 은」(は)がついた形でほとんど現れている。助詞「는, 은」(は)を特別に区別せず、「그러니까는」、「그러다가는」、「그러면은」、「아니면은」のような形をまとめて〈接続詞〉として扱う。

3. 「그래 갖고(구)」(そうやって), 「그래 가지고(구)」(そうやって):

辞書的には2単語で分析的な形、なおかつ接続形に相当するものである。しかし、「그래 갖고(구)」、「그래 가지고(구)」以外の形には変化しないという点と、

会話では接続詞の機能でたくさん用いられているという点から、本稿では1単語の「接続詞」として扱う。

4. 「-에 대해서」(…に対して), 「-에 관해서」(…に関して):

前述したように、菅野裕臣(1986)では「後置詞」として呼ばれたものである。本稿では「動詞」の活用形として扱う。

5. 映画や本などの題目:

映画や本などの題目で終わっている文は名詞として扱う。

例: 너 그거 봤어, '지우개'. (あれみた? '頭の中の消しゴム'.)

6. 用言の活用形(用言の語基+語尾)+助詞「만」(だけ):

「좋아만」(好きでいるだけで), 「노말하게만」(普通に)のように用言の活用形に助詞만(だけ)がついた文は、それぞれの用言の品詞で区別する。ここでは「좋아만」(好きでいるだけで)は「動詞」, 「노말하게만」(普通に)は「形容詞」として扱う。

例: 좋아만 (하고 있지) . (好きでいるだけだよ)

노말하게만 (입으면 돼) . (普通に着ればいいでしょ)

7. -요/-이요(…です):

-요/-이요は待遇法上の丁寧、非丁寧の違いだけで、形態論的には形が変わることはない。

敬意体	-요/-이요
非敬意体	φ

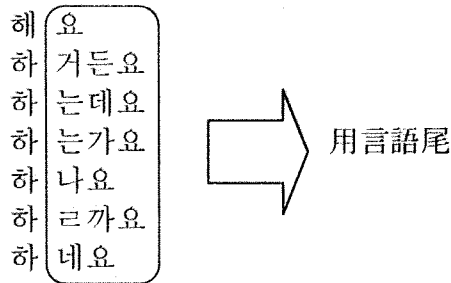
-요/-이요が日本語の終助詞の性格と非常に似ていることから、本研究では、終助詞(Final partical)として扱う。

-요/-이요は名詞や副詞などについて敬体の待遇を現し、「非述語文」に属する。

-요/-이요 に該当するものが日本語にはないため、「非述語文」は日本語はほとんど常体になるところが、日本語と韓国語の注目すべき違いの1つである。

しかし、次のような用言語尾に付く-요は終助詞ではなく、用言語尾に含まれ

るものとして扱う：



8. 「여기서」(ここで), 「누가」(誰が), 「제」(私の)：

여기서(ここで), 누가(誰が), 제(私の)の例のごとく, 助詞が短縮されたり, 助詞の形がなくても, 助詞の意味がある単語は「名詞+助詞」のように品詞を記す.

9. 「진짜」(マジ, 本当), 「정말」(本当):

辞書的には程度を表す「とても」, 「すごく」の意味である場合は「副詞」, それ以外は「名詞」として扱っている.

しかし, 本稿では「진짜」(マジ, 本当), 「정말」(本当)があいづち的な発話として用いられている場合は「間投詞」として扱う. 日本語の「本当」, 「うそ」などがあいづち詞の「間投詞」で扱われている同様の所以である.

10. 그렇죠(そうでしょう, でしょう), 그래요(そうですね), 그치(だろ):

あいづち詞として使われる「그렇죠」, 「그래요」, 「그치」は, 「形容詞」として判定する.

11. 「아니요」(いいえ)と「아니야」(違うよ):

「아니요」, 「아뇨」, 「아니」のような応答詞は「間投詞」として判定する.

一方, 「아니지」, 「아닌데」, 「아니야」, 「아냐」のような, 語尾がついている形のは「指定詞」として扱う.

12. 擬声語, 擬態語:

名詞として扱う見解もあるが, 動詞や述語を修飾するため, 本稿では副詞として扱う.

13. 「미친듯이」(勢いよく), 「어쩔 수 없이」(仕方なく):

辞書に提示されていない単語は、機能的に判断し、品詞を決める。

上記の単語は「副詞」として扱う。

4.1.2.3. 本稿における日本語と韓国語の品詞分類

上記の点を踏まえ、本稿における日本語と韓国語品詞分類は次のように整理する：

表 29 本稿における日本語と韓国語の品詞対照

	韓国語		日本語	
用言	動詞 Verb	学校文法と同様	動詞 Verb	学校文法と同様
	形容詞 Adjective	学校文法と同様	形容詞 Adjective	打消の「ない」、希望の「たい」が独立して現れている場合。「美しく」のような形容詞のいわゆる「く形」。
	指定詞 Copula	-이다와 아니다의 2 単語. ほぼ形容詞と同じ変化をするが、一部で特殊な変化形を持つ。だけは接尾辞的である。体言+指定詞は本来は体言の述語形とでもいうべきものである。	指定詞 Copula	学校文法の助動詞の中で、山田孝雄(1921:119)が「存在詞」という「だ」「である」「です」。
存在詞 existential	있다와 앉다의 2 単語およびそれらを含む合成用言(あるときは動詞的に、あるときは形容詞的に変化する)		なし	
		なし	形容動詞 adjective verb	形容動詞の基本形である「だ」や、「静かな」「静かで」のように形容動詞の語幹に「な」「で」がついたもの。
体言	名詞 Noun	学校文法と同様	名詞 Noun	代名詞、数詞、「もの」「こと」などの形式名詞、「見物」「出航」などの漢語の語幹、時枝誠記(1950:157)が提示した「体言的接尾語」類がついたもの、「形容動詞の語幹」。
その他	連体詞 adnominal	学校文法の冠形詞	連体詞 adnominal	学校文法と同様
	副詞 adverb	学校文法と同様	副詞 adverb	形容動詞の語幹+に、「そんなに」「こんなに」「あんなに」「どんなに」。
	接続詞 conjunction	学校文法では接続詞を副詞として扱っている。文の頭に立って文と文をつなぐか、単語と単語をつなぐ単語。	接続詞 conjunction	学校文法と同様

間投詞 Interjection	学校文法と同様	間投詞 Interjection	学校文法で感動詞と呼ばれるもの。感動、呼びかけ、応答などを表すもの以外に、あいづち詞(そう、なるほどなど)も間投詞として扱う
笑い Laugh		笑い Laugh	「あ」、「えー」などの間投詞との区別を図るため、間投詞の下位分類に位置づける。
	なし	助動詞 auxiliary verb	用言の連用形につく(せる、させる、れる、られる、しないのない、しましよのましよう、いこうのうなど)助動詞は、「用言の連用形+助動詞」は「用言」の品詞で決定する。 連体形や終止形、名詞、副詞などにつく(らしい、そうだ、ようだ、みたいだなど)助動詞は、「本体の品詞+助動詞」のように助動詞を記す
助詞 Particle	終助詞-요 yo のみを Final partical の「F」で、表す。他の助詞は P で表す。	助詞 Particle	終助詞(ね、か、な、よ、ぞ、ぜ)は Final partical の「F」で、接続助詞は cOnjunction partical の「O」で表し、格助詞、副助詞などの終助詞、接続助詞以外の助詞は P で表す。

4.1.2.4. 用言の総合的な形と用言の分析的な形の品詞解析

上記の 1.1.1 で述べた、用言の総合的な形と用言の分析的な形に関しては、次のように品詞分類を行う。

4.1.2.4.1. 用言の総合的な形

用言の総合的な形の場合の品詞分類の例を上げる。

1. 体言に語尾がついている場合はそれぞれの品詞を表す：

日本語：スペインに行ったのはいつですか。

韓国語：스페인에 간 게 언제예요?

名詞+指定詞: NC

「-이다」「です」のような指定詞は付屬的な単語であるため、名詞などの前の要素を合わせて 1 単語として扱い、総合的な形として判断する。

2. 用言に接尾辞や語尾，連用形，未然形に助動詞などがついている場合は本体となる用言の品詞で表す：

日本語：一応ある会社に**決まりました**。

韓国語：일단 한 회사는 **붙었어요**。

動詞 V

3. 「してしまう」は分析的な形で判断すが，その話しことば形の「しちゃう」は総合的な形として判断する。

すごいやだ，なんかもうって感じだったんですけど，なんかなれちゃって。

動詞 V

4. 「하지 않아요」(しません)は分析的な形として扱うが，「하잖아요」(するじゃないですか)は総合的な形として扱う。

4.1.2.4.2. 用言の分析的な形

記号化においては，Verb と Grammatical から，本体になる用言の品詞の次に G を付し，「分析的な形」であることを表す：

1. 日本語と韓国語の分析的形が一致する場合：

日本語：私もその温泉，**行ったことありますよ**。

韓国語：저두 그 온천에 **가 본 적이 있어요**。

動詞の分析的形:VG

2. 日本語と韓国語の総合的な形と分析的な形が一致しない場合もある：

日本語の総合的な形が：語学研修は基本になっちゃって。



動詞 V(総合的な形)

韓国語の分析的形になる：어학연수는 기본이 돼 버려 가지구。

動詞の分析的な形:VG

3. 総合的な形，もしくは分析的形の後にさらに品詞がくっついている場合は，「総合的な形

を成す品詞+後続する単語の品詞」で表す：

最近ちょっとお休みしちゃってるみたいですけど。

動詞 V + 助動詞 X+ 指定詞 C+ 終助詞 F

6. 体言につく、「で」、「です」は「名詞 N」+「指定詞 C」として判定するが、体言につく、「なんで」、「なんです」は「指定詞」の分析的な形として扱い、「CG」で判断する：

例：あと乱視なんですよ。：名詞+指定詞の分析的な形+終助詞(NCGF)

例：4月から就職なんで。：名詞+指定詞の分析的な形 (NCG)

4.1.3. 用言の形態・機能的カテゴリー

文末に用言が来る文など、用言それ自体の形に注目する必要がある場合には、文末の用言の形態を見ることで、当該の文のあり方を照らすことにする。日本語における「学校文法」(中光雄編(2001), 橋本進吉(1934))による「活用形」は次のようなものがある。

連用形：(1)ことばを中止し、下の語に対等の関係で続ける。

(2)用言につづいて、その意味を修飾し又は補足し、又は意味上結合する。

(3)(動詞の)連用形に助詞「に」をつけてある動作の目的たる事を表す。

終止形：文がそこで終止することを示す。

連体形(終止形と同様)：(1)体言につづいてその意味を修飾する。

未然形(仮定形)：口語では単独で用いらない。

命令形：命令の意味を表して文を終止する。

韓国語における用言の諸形は次のようなものがある。用言の様々な形を文における機能の面から見ると、次の5つに分類できる。野間秀樹(2000)に従う。なお、I、II、IIIは用言の語基⁵¹を示す：

終止形：文を終止させる I-습니다, II-니다, III-요 など。

接続形：文をつなぐ I-고, II-면 など。

連体形：体言を修飾する I-는, II-ㄴ, II-ㄹ など。

⁵¹ 語基については、河野六郎(1979), 菅野裕臣(1981), 野間秀樹(2000)参照。

名詞形：名詞の働きをする II-로, I-기 など.

引用形：引用の構造を作る II-하다고, II-하다는 など.

「未然形」などという名称がそれ自体で「未然」という働きを成すものでないことをみてもわかる通り、日本語におけるいわゆる「用言の活用形」が文の機能の面からの活用を扱っているものではないため、本研究では、機能的に分類された韓国語における用言の上の諸形を、日本語へも適用し、文の文末に現れる用言の形態・機能的なカテゴリーとして用いる。日本語は次のようなものになる：

終止形：文を終止させる

接続形：文をつなぐ。「けど」、「から」、「ので」、「たら」など接続助詞がつくものと、「テ形」、「ば形」など.

連体形：体言を修飾する。「な形」の助動詞と形容動詞のなど.

名詞形：名詞の働きをする.

引用形：引用の構造を作る「て」、「ていう」など.

4.1.4 スピーチレベル

〈文がいかなる構造体で現れているのか〉を見ることは、文の待遇法と深いかわりを持っている。そこで本研究では今後折りに触れ、待遇法にも言及することがある。ここではそうした待遇法についての本研究の基本的な立場を簡単に確認しておくことにする。待遇法は聞き手との関係を表すゆえに、談話においては非常に重要な要素である。また待遇法は多くは文末にのみ現れ、文末においてこそ観察できる、文末の構造体の要素としては不可欠なものである。ここでは待遇法の段階を〈スピーチレベル〉と呼び、次のようにスピーチレベルの分類を行う。

本稿におけるスピーチレベルの分類法は基本的には宇佐美まゆみ(1995, 2002)、金珍娥(2002)に倣うが、具体的な分類項目は若干の修正を加える。

4.1.4.1 日本語と韓国語の先行研究におけるスピーチレベルの分類

日本語の丁寧語において大石初太郎(1974)は、「もっぱら聞き手に敬意を表わすことば」として、「です・ます体が代表的なもの」と述べている。また、菊池康人(1988)は「です・ます体」を「敬体」と呼び、それに対する普通の表現は「だ・である体」として「常体」と呼んでいる。

韓国語においては성기철(1983), 고영근(1974), 서정수(1984)などにより、1940年代

までのスピーチレベルの一部が消えていることやその使い方の変化が指摘されていることから、本研究では 1950 年代以降の現代ソウル方言に現れるスピーチレベルを扱うことにする。韓国語におけるスピーチレベルに関する研究は数多く行われているが、その中でもスピーチレベルを格式体と非格式体に分ける研究方法は 서정수(1984) 남기심, 고영근(1993), 노마히테키[野間](1996a)などにより盛んに行われてきた。

서정수(1984), 남기심, 고영근(1993)のスピーチレベル分類を再整理してみると次のようになる：

尊待の格式体：합쇼 hapsyo 体(합니다 hapnita 体), 하오 hao 体

尊待の非格式体：해요 hayyo 体, 하게 hakey 体, 해라 hayla 体 (한다 hanta 体)

非尊待の非格式体：해 hay 体

ところが、서정수(1980)の「하오 hao 体と하게 hakey 体の使用が目立つほど少なくなり、해요 hayyo 体と해 hay 体の使用は圧倒的に増えている」という報告もされており、以下の表に示す 노마히테키[野間](1996a)によるスピーチレベルの分類が現代ソウル方言に最も相応しいものであると思われる。

上記の内容をまとめ、日本語と韓国語におけるスピーチレベルを本研究が整理して提示すると、次のようになる：

表 30 日本語におけるスピーチレベル

敬体	です・ます体
常体	だ・である体

表 31 韓国語におけるスピーチレベル

敬意体	+ formal(格式)	합니다 hapnita 体
	- formal(非格式)	해요 hayyo 体
非敬意体		한다 hanta 体
		해 hay 体

韓国語のスピーチレベルは 노마히테키[野間](1996a)の「会話体での待遇法の体系」を筆者が再整理したものである。日本語と韓国語のスピーチレベルが敬体と常体で大きく 2 つに分けうることは同様であるが、日本語の敬体が「です・ます体」の一種であることに対し、韓国語の敬体は「합니다 hapnita 体」と「해요 hayyo 体」の 2 種が存在している。また、日本語の常体も「だ・である体」の 1 種であることに対し、韓国語の非敬意体は「한다 hanta 体」と「해 hay 体」の 2 種に分けうる点で異なる。韓国語における敬意体の「합니다 hapnita 体」と「해요 hayyo 体」の違いは「합니다 hapnita 体」が「+ formal (格式)」の性格を持っており、「해요 hayyo 体」が「- formal (非格式)」の性格を持っていることであろう。「하오 hao 体」と「하게 hakey 体」がない、上記の表のような韓国語のスピ

一チレベルの分類が、ソウル方言話者である筆者の直感とも合致するものである。以上の分類を中心に据え、以下、本研究におけるスピーチレベルを述べる。

4.1.4.2. 述語の有無とスピーチレベル

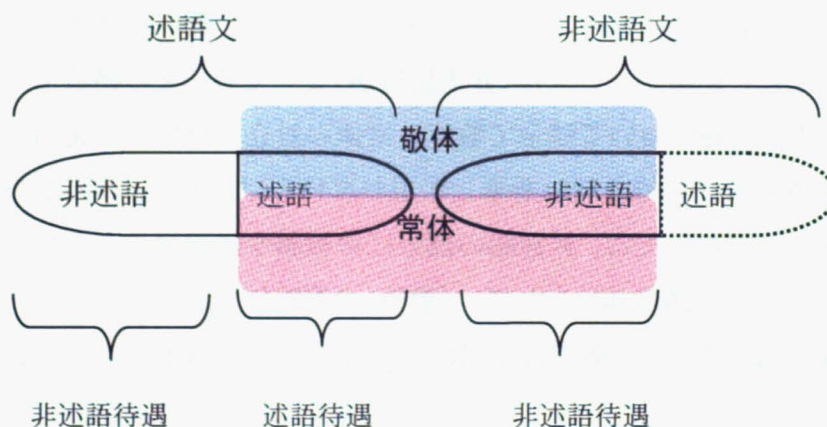
スピーチレベルを記述するに際しては、まず、言語形式は文末の述語の形式と、それ以外の部分の諸形式の2つに分けて考察する。前者による待遇を**述語待遇**、後者による待遇を**非述語待遇**と呼ぶことにする：

述語待遇：述語に現れる待遇

非述語待遇：述語のない発話に現れる待遇

本稿では、述語待遇、非述語待遇というこうした2つの項目から、聞き手に対する1文のスピーチレベルを同定する。以下の図に述語文と非述語文における述語待遇、非述語待遇を担う部位を示す：

図 12 述語文と非述語文における文末待遇と非文末待遇の関係



日本語や韓国語にあって、およそ待遇法は言語形式の上では述語にのみ現れる要素である。上述のごとく、述語に現れる待遇法を本研究では述語待遇と呼ぶ。しかし、スピーチレベルはこうした待遇法の諸形式によってのみ維持されるわけではない。実は、スピーチレベルの維持には文末の待遇法以外の要素が深く関わっている。既存のスピーチレベルの研究にあっては、後述のように実際の談話に数多く出現する「述部のない発話」に対する位置付けが全くなされていなかった。そうした中で金珍娥(2002)は日本語の会話においては発話の半分近くを述語のない発話が占めていることを明らかにした。

このように「述部のない発話」が半分ほど現れているにもかかわらず、我々は談話においては述語に現れるスピーチレベルの存在を常に意識している。つまり言語形式の上では待遇法語尾が存在しない場合であっても、聞き手に対する待遇、即ちスピーチレベルは事実上、常に機能しているのである。

音声に現れた丁寧/非丁寧という性格をもって、発話を敬体/常体相当の発話として判断しうる例も多々存在するが、述部のない発話、即ち、待遇法語尾がない発話のスピーチレベルを決定付ける要素は、他ならぬ述部以外の要素に求めることができる。述語のない発話に現れた待遇を本稿では非述語待遇と呼ぶ。

こうした述語のない発話に現れた非述語待遇は、金珍娥(2002)で見たごとく、述語以外の要素、即ち本研究で呼ぶ非述語待遇というデバイスにより、そのスピーチレベルの機能が支えられるのである。これらについての詳細は談話の分析を通して見てゆくことにする。

4.1.4.3. 日本語におけるスピーチレベル

1文ずつ文を見てゆくことにあたって、本稿におけるスピーチレベルを判定せねばならぬ場合は、まず述語の有無に着目する。上述のように、述語がある文においては、〈述語待遇〉としてスピーチレベルの最も基本となる敬体と常体の判定を行う。「します/する」のような、敬体と常体の対立を持つ述語が出現した場合は、敬体か常体のうち当該の項目で判定する。また、述語がない文は〈非述語待遇〉を立てる。文の構造上で述語を持たない発話文は、述語待遇においては全て敬体と常体の対立を持たない発話ということになる。敬体と常体の対立を持たない要素しか現れない文は、全て、非述語待遇と判定する。非述語待遇の文においては、非述語の部分に尊敬語や謙譲語のようないわゆる「格式語」がある場合は〈非述語敬体〉として、「敬体」の範疇に入れる。非述語の部分に尊敬語や謙譲語のようないわゆる「格式語」がない場合は〈非述語常体〉として、「常体」の範疇に入れる：

なお、先行研究である、宇佐美まゆみ(1995,2002)と金珍娥(2002)ではスピーチレベルを「敬体」、「常体」と「述部のない発話」に大別している。しかし「述部のない発話」といった、述部があるのか、ないのかを尋ねることは、スピーチレベルを尋ねることとは次元が異なるものとして本研究は捉える。すなわち「述部のない発話」は統辞論的な観点から〈述語の有無〉の項で扱い、スピーチレベルは〈述語待遇〉と〈非述語待遇〉とに分け、それぞれの敬体と常体というスピーチレベルの判定を行うことにする。

表 32 日本語におけるスピーチレベル

	非述語待遇	述語待遇
	敬体や常体の待遇を持たない文。 述語がない発話、あいづちなどの 間投詞、笑いなど	敬体や常体の待遇を持つ文 述語がある発話
敬体 P (Polite)	非述語敬体 Zero-Polite 尊敬語, 謙譲語などの「格式語」を含 む文	述語敬体 polite 述部が「です・ます体」の敬体であ る文
常体 N (Non-polite)	非述語常体 Zero-Non-polite 尊敬語, 謙譲語などの「格式語」が含 まれていない文	述語常体 Non-polite 述部が「だ・である体」の常体である文

本稿では「敬体/常体」という対立の存在に注目し、発話文をどこまでも対立項からなる範疇として扱っているのである。

なお、述語待遇の敬体は Polite の P で、常体は Non-polite の N でマークする。非述語待遇は述語がないという意味の“zero”を付し、非述語敬体は ZP、非述語常体は ZN でマークする。述語の敬体と常体の対立を持たない非述語文には、すなわち述語がない発話やあいづち詞などの間投詞、笑いなどが含まれる。

あいづち詞などの間投詞においては、以下の 4.1.4.4 で詳細に述べる。敬体と常体の「対立項を持たぬあいづち」においてのみ文脈の流れと音声面を考慮に〈非述語敬体〉、〈非述語常体〉を区別する。次にスピーチレベルの判定例を掲げる：

[日本語におけるスピーチレベルの判定例]

同女	ラオス語は結構、 <u>話</u> せますか？ 敬体	ほー、 <u>私</u> は全然 <u>話</u> せない。 非述語常体	常体
同男	挨拶とか一、 <u>買</u> い物とか一。 非述語常体	ご専門は？ 非述語敬体	

4.1.4.4. 韓国語におけるスピーチレベル

韓国語におけるスピーチレベルの判定⁵²は、上で提示した노마히데이키 [野間] (1996a) の「会話体における待遇法の体系」に依る。

述語がある文においては、「述語待遇」の中で、「述語敬意体」と「述語非敬意体」に分け、

⁵² 金珍娥(2002:59)では、日本語の敬体 P に該当するものを次のように 4 つに区別している。P：敬意体の hayyo 体、Pf：敬意体の hapnita 体、Pi：命令法の中称形 hayyo、Pc：勧誘法の中称形 hapnita、hayyo。Pf は格式性を持つ点で、格式性のない P とはことなり、Pi、Pc は目上の人には使いにくいなど、その機能が P とは明らかに異なるため、それぞれ P と区別し、コーディングを行っているのである。しかし、本稿ではこれらを整理し、Pf、Pi、Pc を、敬体 P の 1 つの枠の中で扱うことにする。

hayyo 体, hapnita 体である文を「述語敬意体 P(Polite)」として判定する. hay 体, hanta 体である文は, 「述語非敬意体 N(Non-polite)」とする. また, hapnita 体が, hayyo 体より格式性を持っていることから, 「述語敬意体 P(Polite)」の中でも hapnita 体は PF(Polite Formal)と判定し, hayyo 体の P とは区別する. また, 日本語同様, 述語がない文は, 「非述語待遇」の中からスピーチレベルを判定する:

表 33 韓国語におけるスピーチレベル

	非述語待遇	述語待遇
	敬意体や非敬意体の待遇を持たない文. 述語がない発話, あいづちななどの間投詞, 笑いなど	敬意体や非敬意体の待遇を持つ文 述語がある発話
敬意体 P (Polite)	非述語敬意体 Zero-Polite 尊敬の接尾辞-si, 丁寧化の語尾-yo/iyo や, 聞き手に対する尊敬語, 謙譲語などの「格式語」を含む文	述語敬体 polite formal 述語が hapnita 体である文 述語敬意体 polite 述語が hayyo 体である文
非敬意体 N (Non-polite)	非述語非敬意体 Zero-Non-polite 尊敬の接尾辞-si, 丁寧化の語尾-yo/iyo や, 聞き手に対する尊敬語, 謙譲語などの「格式語」が含まれていない文	述語非敬意体 Non-polite 述語が非敬意体の hay 体, hanta 体である文

日本語同様, 「非述語待遇」のスピーチレベルにおいてはさらに「非述語敬体」, 「非述語常体」という下位分類を行う. 述語がない発話で, 述語に敬意体が現れていなくても, 聞き手に対する尊敬語や謙譲語などの「格式語」が現れている場合は「非述語敬体」として, 尊敬語や謙譲語などの「格式語」が現れていない場合は「非述語常体」として判定する. 韓国語におけるあいづち詞などの間投詞においても敬体と常体の「対立項を持たぬあいづち」においては, 文脈の流れと音声面を考慮に「非述語敬体」, 「非述語常体」を区別する. (次のあいづち発話の項で詳細に述べる.)

次にスピーチレベルの判定例を掲げておく:

[韓国語におけるスピーチレベルの判定例]

同女	(お仕事は? 専攻は何でいらっしゃいますか, あー. 私は日本語科です. ま, ちょっと.) 하시는 일은?. 무슨 과세요?. 아- 전 일어과예요. 뭐 그냥 줄.	非述語敬体	敬体	非述語敬体	敬体	非述語常体
同男	학생입니다. 서반아어과요. 일본어 잘 하시겠다. (学生です. スペイン語科です. 日本語お上手そう.)	敬体	非述語敬体	常体		

4.1.4.5. あいづち発話を含む機能志向発話(function-oriented utterance)のスピーチレベル

本研究では杉戸清樹(1987)がいう「実質的発話」を〈内容志向発話〉(content-oriented utterance)と呼び、杉戸清樹(1987)がいう「あいづち的な発話」を含め、間埋め(filler)、前置きなど、主としていわゆる談話的な機能を司る発話を〈機能志向発話〉(function-oriented utterance)⁵³と呼ぶことにする。あいづち発話を含む機能志向発話におけるスピーチレベルの判定基準は、金珍娥(2002:63)を一部修正し、次のように位置づける：

表 34 日本語と韓国語におけるあいづち発話を含む機能志向発話のスピーチレベルの類型

		(1)文法的な対立項を持つ	(2)語彙的な対立項を持つ	(3)対立項を持たない
		述語のある発話	述語のない発話	
敬体 P	日本語	そうですね, そうですか	はい, ええ, やはり	なし
	韓国語	그래요? 맞아요.	네, 예, 예	
常体 N	日本語	そうだね, そうか	うん, やっぱり	なし
	韓国語	그래? 맞아	응, 어	
非述語敬体	日本語	なし	なし	え, はあ
	韓国語			아, 음, 어
非述語常体	日本語	なし	なし	へ, あ, んん, ね
	韓国語			허, 아, 음, 어

あいづち発話文は、(1)文法的な対立項を持つあいづち、(2)語彙的な対立項を持つあいづち、(3)対立項を持たぬあいづちの3つの類型に分類し得る。「그래요?!(そうですか)」のように述語を持つあいづち発話は文法的対立項を有するが、述語のないものは文法的対立項を有さない。一般に全ての語彙は文の中にあっては何かの文法的属性を持つが、そのうち語彙的な対立項があるもの(2)と、ないもの(3)に分類しうる。

述語として機能しうる、文法的な対立項を持つ(1)のあいづちと、述語として機能せず、語彙的な対立項を持つ(2)に属するあいづちは、敬体と常体のスピーチレベルの判定を行う。

なお、「へ」、「あ」、「ん」、「ね」のように、述語として機能せず、語彙的な対立項も持っていない(3)に属するあいづちのスピーチレベルは、文脈や音声面を考慮に入れ、非述語敬体と非述語常体に判定する。非述語文は「述語がない」という意味で Zero の Z で表し、非述語敬体は Zero Polite の ZP、非述語敬体は Zero Non-polite の ZN で記号化する。

⁵³金珍娥(2004b:93)参照。

4.2. 倒置文の文末の形の文法的同定

文末の形を同定する際に、〈倒置〉の問題にも触れておかなければならない。亀井孝他編(1996)の「倒置」によると、日本語においては「文法的な倒置は起こらない」とされている。しかし、「日常のパロール」では「術語を必ず文末におかなければならない統語的規則に明らかに反する」現象がしばしば見られ、こうした現象は「倒置よりも補足的な言い回しとみるべきかもしれない」と述べている。

亀井孝他編(1996)のこうした記述を参考に、本研究では〈倒置文〉は、次のようなものとして定める：

倒置文：統辞的文法規則による語順とは異なる文

倒置文は、その中身を見ると、あることがらを言い、終るや否や不足していることがらを付け足している文となる。後で付け足した発話を前部の発話に対する倒置で見るべきか、前部の文とは異なる独立した文としてみるべきかは、前部の発話の音声的側面と、前部の発話と後部の発話との間のポーズを基準にして判断する。ポーズが2秒以上生じている場合は付け足した発話を前部の文とは異なる独立した文として判断する。

倒置文においては、後で付け足した部分に注目し、〈述語の有無〉、〈品詞の解析〉を行う：

表 35 倒置文の判定例

	倒置文	述部	品詞
日本語	かゆいですし、鼻。	無	名詞
	いやですね、難しくて。	有	形容詞
韓国語	그거 보셨어요? 혹시? (あれみましたか、もしかして.)	無	副詞
	지금 차가 막히지 않아요? 그쪽으로 가면. (今、道込んでるんじゃないですか、そっち方面へ行くと.)	有	動詞